

シンポジウム「認知症と向き合う

シンポジウム「認知症と向き合う」（毎日新聞社、認知症予防財団など共催、アフラック協賛）が10月10日、高知市の高新RKCホールで開かれた。認知症を患った母の介護体験

をまとめたドキュメンタリー映画「毎日がアーツ・ハイマー」(関口祐加監督)が上映され、関口監督と同作品を医学監修した新井平伊・順天堂大学大学院教授のトークショードで約650人が熱心に耳を傾けた。

映画の中でお母さんは「うるさい」と怒る。人間としての正直な思いが出ていい。認知症になつても人間らしさ、ピュアな気持ちはある。がお母さんをいとおしく感じる。くる。またいい介護かできていると、患者さんは穏やかに日々を過ごせる。それがいい。イライラしたり、怒りっぽくなる。監督はお母さんをいたまには見ると怒る。説明してもすぐ忘れる。最後に私は手術した傷口を母に見せた。水戸黄門の日籠ではないが「これを見てくれ」と。それから母は收まった。たまには見

いる。普通、身内であればあるほど認知症の人に対する理解が深くなる。我々も身内に治癒できない。介護もプロの人、家族の中ではお嬢さんが冷静にできたりす

母の介護体験、作品に

母は魅力的被写体

新井平伊教授「毎日がアルツハイマー（毎アル）から「毎日がアルツハイマー（毎アル2）」へ、どんな思いで映画を製作したのですか。」
関口祐加監督「毎アルの時、母は初期の認知症だった。2年半、毎日がもの苦しそうだった。うちではお笑い家族なので、笑いで母を包んであげようとした。『毎アル2』は母の認知症が進み、本人も言っているように、つらさがなくなってきた。私の言ふことを何でも聞き、状況的には良く思えるが、これから向かう母の最終ステージで認知症のケアをどうすればいいか、「パーソン・セントラード・ケア」という言葉に出会い、その治療をやっている施設に行つてみたいと思った。『毎アル2』は私の認知症ケア探求の旅です。」

新井 認知症初期の大変

この日上映の「毎日がアルツハイマー2」の前編となる「毎日がアルツハイマー」について、関口監督が、劇場版予告編を流しながら解説し、続いて「毎日がアルツハイマー2」を上映した。

「毎日がアルツハイマー」の解説

アルツハイマー病と診断された母と過ごす毎日を2年半にわたり撮影した記録映画で多くの人々の共感を呼んだ。母の喜怒哀楽を通して、家族のあり方、人間の尊厳とは何かを問いかけている。

続編「毎日がアルツハイマー2」の上映

母の認知症症状が少しずつ進行してからの編。閉じこもり生活に変化が表れる。ティーサービスに通えるようになり、嫌がっていた洗髪もする。娘（関口監督）と一緒に外出もする。その表情は幸せそうだ。しかし、調子が悪い日は、感情の起伏が激しく、突然怒りが込み上げたり、一日中ベッドにいたりすることも。そんな母との生活の中で「パーソン・セナタード・ケア」（P・C・C=認知症本人を尊重するケア）という言葉に出会った関口監督は、自ら認知症介護の先進国イギリスへ行く。認知症の人を中心に考え、その人柄、人生、心理状態を探り、一人一人に適切なケアを導き出すP・C・Cを学んでくる。

「毎日がアルツハイマー2」の上映情報

- ・11月21日（金）まで兵庫・神戸アートビレッジセンターにて公開
- ・京都・京都シネマにて公開予定（日時調整中）
- ・DVDの購入や自主上映会についての問い合わせは配給会社シグロ（電話03・5343・3101）まで

映画監督

関口 祐加さん

せきぐち・ゆか 1957年、横浜市生まれ。大学卒業後、オーストラリアへ渡り、89年の第1回監督作品「戦場の女たち」はメルボルン国際映画祭でグランプリを受賞。「T・エトワ・トイエット！」(2007年)で自らを被写体に涙ぐましい減量作戦を撮影し、海外で多くの賞を受けた。12年認知症の母親を主人公にしたドキュメンタリー「毎日がアルツハイマー」を公開。現在まで、日本全国150カ所以上で上映される大ヒットとなる。その続編となる「毎日がアルツハイマー2 関口監督、イギリスへ行く編」が完成。今夏より東京、横浜ほか全国にて順次公開中。

順天堂大学大学院精神・行動科学教授 新井 平伊さん

あらい・へいい 1953年生まれ。84年順天堂大学大学院修了。東京都精神医学総合研究所主任研究員、順天堂大学医学部講師を経て、97年より現職。99年、我が国で唯一の「若年性アルツハイマー病専門外来」を開設。日本老年精神医学会理事長、日本認知症学会理事、国際老年精神医学会(IAPA)理事。おもな著書に「アルツハイマー病のすべてがわかる本」(講談社)、「最新アルツハイマー病研究」(ワールドプランニング)など。




トークショーで関口監督と新井教授の話に熱心に聴き入る参加者

新井 僕が感激したのは監督の行動力です。プロの手を借りる、どこへでも行く、誰とも相談する。相談すると、プロは何かしらヒントを与えてくれる。結果、認知症介護で良い影響力を与えるのは行動力しかない。

関口 ケアマネジャーさんは私が大変なのを見て、「デイサービスを使いましょう」と勧める。母は「私が邪魔だからティに行かせること」となる。では、どうするか。私はプランBと呼んでいる。人生はプランAがもちろんいい。でもプランAうまくいかない場合もある。母の3年ばかり

新井 今 日本で理想的な介護は、指摘のように難しい。監督の家庭が恵まれているかというと、そうでないと思う。監督が四方八方に動いて今のところは洛ち着いてきた。苦労は人倍されている。介護にパーソン・セントアード・ケアを取り入れようど、こういつつ映画を作る。それは一つのモデルとして情報が提供され、介護の手がかりとな